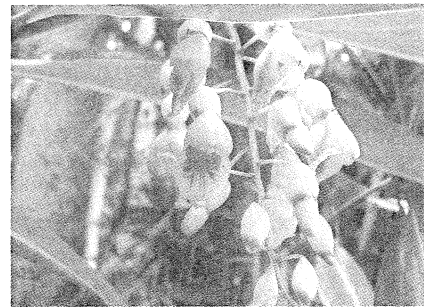




ゲットウ



タブノキ



ユスラヤシモドキ

参考文献

- 1) 東清二監修(2002)琉球昆虫目録, 沖縄生物学会.
- 2) 比嘉正一(1993) 東南植物楽園内の蝶類(1982年～1983年) 琉球の昆虫(15): 60～72.
- 3) 比嘉正一(1997) 東南植物楽園内の蝶・セミ・トンボ(1990～1992年), 琉球の昆虫(17): 31～37.
- 4) 比嘉正一(2002) 東南植物楽園(沖縄市)で蝶のメモを通しての成果から, あやみや 11:34～39.
- 5) 比嘉正一(2002)2000年に沖縄島で記録した蝶, 琉球の昆虫(21): 49～55.
- 6) 比嘉正一(2003) オオゴマダラ *Idea leuconoe* の飼育—これから飼育したい方のために—, あやみや 12:1～5.
- 7) 比嘉正一(2003) 蝶類の記録(1997年, 1998年), 琉球の昆虫(22): 12～23.
- 8) 比嘉正一(2003) 蝶類の記録(1999年), 琉球の昆虫(22): 24～32.
- 9) 比嘉正一(2004) 蝶類の記録(2001年, 2002年), 琉球の昆虫(24): 51～56.
- 10) 比嘉正一(2004) 蝶類の記録(2003年), 琉球の昆虫(25): 39～51.
- 11) 星川清親・千原光雄(1970) 食用植物図説, 女子栄養大学出版部.
- 12) 池原直樹(1979, 1989) 沖縄植物野外活用図鑑全 10 巻, 新星図書出版.
- 13) 沖縄園芸百科(1985) 新報出版.
- 14) 園芸植物大事典 1-6 巻(1988) 小学館.
- 15) 仲須賀常雄・高山正裕・金城道男(1992) 沖縄のヤシ図鑑, ボーダーインク.
- 16) 初島住彦・天野鉄夫(1994) 琉球植物目録, 沖縄生物学会.
- 17) 熱帯・亜熱帯都市緑化植物図鑑(1996) (財) 海洋博覧会記念公園管理財団.
- 18) 坂崎信之編著(1998) 日本で育つ熱帯花木植栽辞典, アボック社.
- 19) 農作物病害虫診断ハンドブック(2001) 沖縄県植物防疫協会.

沖縄市東部の電力供給とラジオの普及について

川副 裕一郎

はじめに

2004 年秋、市内小学校から「社会科の授業の関連として子どもたちの祖父母が子供だったころの、生活に関わる資料が見たい」との申し出が多くあった。現在、60 歳代の方をモデルとして説明を行っているが、資料が使われていた時期については地域的な差があるものと思われる。しかし、当時の生活や娯楽について、子供たちへの説明に適したものがまとめられていないため、作る必要があると感じた。

本稿では沖縄市という大きな枠組みではなく、字単位での電力供給とラジオの普及について分りやすく説明するための基礎資料となるものを目指したい。特に電力供給とラジオの普及に焦点を当てたのは、聞き取りの行いやすさと、生活への密着度が高く、これらのことから戦後復興期の沖縄市の様子が明らかにできるのではと考えたからである。

本稿は 1. 電力供給について 2. ラジオ普及について 3. 地域の聞き取り 4. まとめ から構成されている。1, 2. については沖縄島や沖縄市を単位として戦前戦後の電力供給とラジオの普及についてまとめ、3. の聞き取りによって、主に沖縄市東部(泡瀬地区周辺)で電力とラジオの普及が生活にどのような変化をもたらしたのか、また、地域によって変化の差異がどのように生じていたのかについて記述したい。

1. 電力供給について

①戦前

沖縄電力調査課によると、沖縄島ではじめて電気が通ったのは 1910 (明治 43・那覇と首里) 年とされる。最終的に沖縄島全域で電力が使用される状況になるのが 1970 (昭和 45) 年である(註 1)。太平洋戦争中、沖縄で地上戦が展開され、電気・ガスなどの設備が破壊されたことを考えても、沖縄島内で 60 年の格差があったことは、児童生徒への説明の点で注意すべきであろう。

戦前の電力の使用状況については、『資料 沖縄経済 20 年史』に、「発電施設も那覇、名護、平良、石垣に火力発電所があって、その周辺の限られた地域に供給、それも主として点灯用で点灯状況は非常に低かった」とある。聞き取りによると沖縄市で電気が通っていた場所は、泡瀬周辺のみだったようである。

②戦後～復帰前

沖縄市では、第 2 次大戦直後の住宅への配電に関する資料が乏しい。これは初期の住宅への配電が、軍の発電所から、もしくは米軍払い下げの小型発電機によるものだったからと思われる。沖縄市水道部『沖縄市水道 30 年史』では、1947 年 3 月に、「旧越来村嘉間良に米軍払い下げの小型発電機によって電灯がともされ、劇場が建ち」とある。沖縄電力調査課の年表にも、

「1947年に米軍払い下げの小型発電機で発電が行われた」とある（註2）。

後述するように、沖縄住民の多くが、この小型発電機による電力供給によって電化生活の第1歩を踏み出した。聞き取りによると、「集落の富裕層が発電機を購入し、付近の家庭に配電し、電気代を徴収していた」という。このシステムにより、戦前、電気が通っていなかったところでも電球を灯すことができた。

しかし、小型発電機による発電の問題として、1951年1月17日朝刊の『沖縄タイムス』紙上で、「小型発電機の寿命はあと1－2ヵ年、部品を入れてもあと4－5年だろうと専門家の間では言われ」、また「燃費がよくないこと、故障が多いこと、点燈時間が短いこと」が挙げられている。また、紙上では挙げられていないが、発電機の有無による配電の格差が字など小さい地域内で起こっていた可能性もある。

小型発電に代わる電力供給源として注目されたのが、軍発電所の余剰電力である。先述の『沖縄タイムス』（1951年1月17日付）では群島政府工務部の2案が報道されている。まず「第1案として1950年から建設が開始された牧港の軍用火力発電所は1952年に竣工する予定なので、その余剰電力を利用し那覇・首里へ配電することを琉球民政府本部に申し出」ている。それに対し琉球民政府本部は「全島的な立場から軍の送電線を利用し泡瀬、石川、嘉手納への配電を計画することを指示」している。第2案は、「1952年度復興費として1億5千万円を要求し、旧沖縄電気会社跡に発電所を設置し、首里、小禄、糸満、与那原、泡瀬、佐敷など戦前の配電地域を復活させる」ことである。紙面を読む限りでは、群島政府は軍用発電所の余剰電力が未確定であることから、自前の発電所を持つ第2案を主体に進めるような文体となっている。

結果的には、第1案が採用となり1953年に完成した牧港の軍用火力発電所からの余剰電力を、配電会社が一般へ供給することとなった。1954年に米国民政府により琉球電力公社が設立される。

沖縄電力調査課によると1953（昭和28）年には民間の配電会社が設立される。沖縄島には3つの配電会社が設立された。沖縄島中部地域に配電を行うのは、そのうちの中央配電株式会社であった（註3）。軍用発電所の余剰電力を琉球電力の基幹送電線により、配電会社に卸供給を行うシステムが完成したのである。1972年、琉球電力公社は株式会社沖縄電力となり、さらに1976年、配電会社5社を吸収し、電力供給は沖縄電力が一貫して行うようになっている（註4）。

2. ラジオの普及について

① 戦前

宮城悦二郎著『沖縄・戦後放送史』によると、日本のラジオ放送開始は1925年の東京放送局によって行われた試験放送とされる。沖縄でのラジオ局（日本放送協会沖縄局）設立と試験放送開始は1941年のことである。この試験放送中に真珠湾攻撃のニュースが流されたという。1941年以前は新聞社や気象台など、ごく一部のラジオ受信機で鹿児島放送局からの電波を受

信できたが、一般大衆が利用できるものではなかった。正式に開局したのは1942年3月からで、そのころにはすでに情報の統制が行われていた（註5）。

沖縄局は1945年3月、米軍上陸作戦前の空襲により、完全に破壊されている。『沖縄県史資料編12アイスバーグ作戦』によると、当時の首里市・那覇市の無線基地、無線方向探知機として目標に挙げられている施設は11あり、日本放送協会沖縄局も米軍上陸前に破壊すべき攻撃目標となっていた可能性があるが、攻撃目標地点の詳細は確認ができなかった（註6）。

② 戦後～復帰前

A ラジオ局設置について

宮城悦二郎著『沖縄・戦後放送史』によると、沖縄戦中（1945年5月）戦後を通して、沖縄では、すでに米軍によるラジオ放送が行われていた。1952年の米国民政府プレスリリースでは、日本語による放送も短時間行われていたとの記述がある（註7）。

沖縄郵政管理事務所編集『琉球郵政事業史』では、沖縄の放送の特徴として「県民を対象にした民立法に基づく放送局のほかにアメリカの特殊放送局即ち米国国務省の海外広報局の管理下にあるヴォイス、オブ、アメリカ（VOA）アメリカ軍直営の放送局AFRTS（中略）などの放送局が多い」ことを挙げ、その理由として「周波数の割当の権限は米国民政府が握っており、放送局を含む無線局の免許及び免許更新は琉球政府がこれについて処置をとる前に、高等弁務官に提出し、その許可を得るものとする、および免許はいつでも再審査することができ、高等弁務官の承認若しくは指示によって取り消すことができるようになっており、このように米国民政府が強大な電波割当権を持っている」ことを挙げている。

沖縄で住民向けのラジオ局（呼出符号AKAR・「琉球の声」琉球放送局）が試験放送を開始したのは1949年である（本格的な放送は1950年）。放送局は具志川市の栄野比である。AKARは軍政府情報教育部（CIE）監督下にあり、本当の意味での民放とは言えなかった（註8）。沖縄郵政管理事務所編集『琉球郵政事業史』によるとAKARは「1951年（昭和26年）12月、栄野比からスタジオを那覇市上之山の軍政府庁舎の一角に、放送所を那覇市楚辺高台に移転し、更に1953年（昭和28年）1月17日スタジオを琉球大学構内に、送信所を豊見城村嘉数に移し、AKARは呼出符号KSAR、周波数740キロサイクルに改め、出力を3キロワットに増力し新局として再出発した。しかしながら、米軍の大巾な予算削減のためにKSARの運営は芳しくなく、1954年（昭和29年）4月1日琉球米国民政府（前軍政府）情報教育部の管理から離れ、琉球大学基金財団に移管された。1954年、（中略）10月1日琉球放送株式会社が琉球大学基金財団より月額30万円（B円）で全放送施設を賃貸契約し局職員を同社が引き継いで放送運営をはじめ、ここに至って本格的な商業放送が開始された」とある。

B ラジオ受信機の普及について

沖縄での戦後のラジオ受信機について、大まかに見て、終戦後は鉱石ラジオ→親子ラジオ→無線ラジオという変遷をたどっている。後述の聞き取りのように、米軍関係者から無線ラジオを譲り受けるケースもあるが、一般的ではなかったと思われる。

鉱石ラジオは電源を必要としない。また、材料と知識があれば自作することが可能である。

このため、鉱石ラジオがどの程度家庭に普及していたかについては、数値として具体的に出すことができない。

一方、親子ラジオは有線によって受信し、同時に電源にもなっているので、ある程度の普及率を読み取ることができる。『琉球郵政事業史』に、親子ラジオの誕生から衰退までの経過がまとめられているので引用したい。「当時の米国陸軍政府と沖縄民政府は、速やかに受信機の普及を図ることとなり、ガリオア資金によってラジオ共同聴取施設が購入され、1952年8月沖縄首里市に初めて設置されて以来、順次各市町村に設置されるようになった。当初ラジオ放送の再送信業務を主に運営されていたこの施設は、地域住民への告知放送なども行うようになり、広報機能を持つ重要な施設として認識されるようになり、各市町村においては拡充されるようになった。また、都市地域においては個人営による施設が設置されるようになり、その放送番組に自主番組も取り入れられるなど放送サービスが図られるようになって、加入者数も急速に増加していき、最盛期の1960年頃になると施設数140、加入者数84,000余の普及を見るに至った。しかし、その後ラジオ、カセットやトランジスタラジオの急増とテレビ放送の開始に伴い次第に減少していった」。1960年の沖縄県の世帯数は約193,000（註9）であることから普及率は43.5%である。

『琉球郵政事業史』では親子ラジオの衰退の原因としてテレビ、トランジスタラジオ等の普及が挙げられている。そしてこれは、沖縄県民の娯楽について、選択の幅が広がったことを意味していると考えられる。

3. 聞き取り

聞き取りでは、囲み線で示した筆者の質問に対し、話者が答えたものを要約した形で記述する。話者のデータとして出身地域、性別、生年を記述した。聞き取り文中の（ ）は筆者の注である。なお、年代については上記した部分と食い違うものも見られるが、今回の聞き取りは「個人の生活の中で、どのように電気やラジオが普及したか」を主眼に置いたため、あえて聞き取りの通り記述した。

① 沖縄市泡瀬1区（旧美浦） 男性 1936年生 採話日2005.1.6

戦後の配電状況

泡瀬地区は美浦（泡瀬第1区）とジョーミーチャー（泡瀬2区）とに分かれていた。昭和25(1950)年には、美浦区では確実に発電器による配電がなされていた。この配電は現在、ビジュルの先にある「トウマ電気」の先代がイシハラという人と始めたもの。旧日本軍の「機械を扱うところにいた」と聞いた。当時、発電と製材を行っていた。電気は23時ごろには消えるものだった。

家庭に裸電球がひとつぐらいしかなかった。他の部屋などはホヤランプを使っていた。2×4角材を使った標準住宅（カバヤー）は1部屋しかなかったので、そう不自由は感じなかったが…… 電気代はべらぼうに高いものではなかったと思う。

現在のような配電状況になるのはずいぶん遅かった。

ラジオについて

最初に流行したのは鉱石ラジオであった。米軍のチリ捨て場から材料を集めて作った。高校生の頃（1952年）、鉱石ラジオのアンテナが家の屋根に張っていたのをよく見た。同じころ、自分は母親がもってきたラジオを聞いていた。このラジオは購入したかもらったものかわからないが、多分もらい物だと思う。ヘルシンキオリンピック（1952年）をこのラジオで聞いたのを覚えている。親子ラジオが普及したのは昭和33（1958）年ごろではなかったか。ずいぶん遅かった感じがする

その他電気について

青空（屋根なし）の劇場が戦後早い時期にできた。美浦劇場という。場所は桃原にあった。昭和25（1950）年、映画館に改築された。ここはひとつ発電機を持っていた。

②沖縄市泡瀬2区 男性 1932年生 採話日2005.1.

泡瀬2区の電化について

ジョーミーチャー（泡瀬2区）の家は美浦（泡瀬1区）に比べるとトタン張りで立派だった。これは、サラエという朝鮮系アメリカ人の通訳が便宜を図ったからだ。サラエさんは終戦直後泡瀬にいた。ジョーミーチャーの住宅の復興が早かったのは、先輩たちとサラエさんの功績だと思う。一方で美浦よりも電化については遅れていたように思う。受験勉強（1946年ごろか）の明かりにはホヤランプを使っていた。鼻の中に煤がたまっていた。ホヤランプは長い間使っていたように思う。

22歳のころ（1954年ごろか）、ワット数の大きい電球が各部屋についた。

電化製品についての思い出

1949年、グロリア台風が来襲した時は、電化製品はなかったが、1959年のエマ台風襲来の際には、家にLPレコードがあり、床上浸水の際の被害を防ぐためにレコードを筆筒の上に乗せた。

ラジオについて

高校生の時（1947年ごろか）、鉱石ラジオを作った友達がいた。音楽が流れていた記憶がある。自分では作っていない。

昭和25（1950）年には、親子ラジオが家に入ったと思う。嘉陽安男の「阿麻和利の乱」のラジオ劇が夕方から流れていたのを、毎日のように聴いていた。電気が来るよりは早かった。アナウンサーの声は、男の声がほとんどだったような気がする。

その他

美浦に映画館ができる前（美浦劇場は1950年に映画館に改築）、具志川の川田まで通って映画を観た。約1里の距離があった。美空ひばりが出演した「悲しき口笛」を観て感動した。家にカラーテレビが来たのは1970年ごろだったと思う。中古の質流れのものを買った。それまでは、隣の家にテレビを見に行っていた。

③高原（1946年）～比屋根（1947年～） 女性 1929年生 採話日2005.2.4.

電化について

高原から比屋根に移るまで、電気はなかった。1947年～1948年ごろの比屋根ではディー

ゼル発電による配電は行われていた。裸電球ぐらいはいきわたっていた。しかし、夜早い時間に消えていたので、それまでに夕飯を済ませなければいけなかった。

米軍人の家族が比屋根にいたので、そのせいで電気が来ていたのかもしれない。

22歳の頃（1951年か）公民館で子供たちに勉強を教えていたが、その時は裸電球があったのを覚えている。ろうそくよりはいいという程度だった。

ラジオについて

弟が高校に通っている頃、鉱石ラジオを持ってきた。比屋根で親子ラジオを聴いたがいつの頃かよくは覚えていない。

④登川 男性 1944年生 採話日 2004.11.10

電気・ラジオについて

電気供給前、登川の裕福な人は自家発電をしていた。自分の家には電気は来ていなかった。小学校4～5年（1954年ごろか）のとき、家に親子ラジオが来た。ラジオの歌が面白く、よく聞いていた。今でも覚えている曲がある。中学校1～2年（1957年ごろか）家に電球がついた。それまでホヤランプを磨くのが日課で、電球が明るいなあと思ったのを覚えている。テレビがついたのは19歳（1963年）の頃だった。

4. まとめ・謝辞

今回の調査で、沖縄市東部の電化とラジオの普及について、以下のことがわかった。

- ①沖縄市東部の電化は、1950年までにディーゼルによる配電が始まっていたが、裸電球を灯す程度のものであり、常時使用できるものでもなかったこと
- ②現在のような電力供給が始まる以前に親子ラジオが普及し始めたことと、鉱石ラジオの普及については地域差が見られること
- ③戦争直後の地域レベルの電化や復興については、その地域に技術を持った人がいるかどうか、米軍と地域的、人的な繋がりがあるかどうかによって左右されている可能性があること

また、今回の調査では、戦後復興期の電力供給に関しては、米軍人、沖縄県民の娯楽との結び付きも強いように感じられた。今後も聞き取りなど継続する必要がある。

最後に聞き取りに快くご協力くださった皆様に心からお礼申し上げる。本稿では、地域を限定したため、聞き取りをさせていただいた全ての皆様からの情報を記述することができなかったが、今後何らかの形で生かしたい。

（註1、2、3、4）沖縄電力調査課「おきでん統計のあらまし 平成16年度版」p131～133の表をもとにした。

（註5）宮城悦二郎著『沖縄・戦後放送史』p2～3

（註6）『沖縄県史 資料編12 アイスバーグ作戦』p175「攻撃目標リスト」をもとにした。

（註7、8）宮城悦二郎著『沖縄・戦後放送史』p9～11、日本人向けの放送についてはp13～p30、p277を要約した。本書では、放送局設置に向けての軍政府の動きなど

が詳述されている。

（注9）総務庁統計局編集『平成7年国勢調査編集・解説シリーズ』2 都道府県の人口 その47 沖縄県の人口』p38、39より抜粋。

参考文献

『おきでん統計のあらまし 平成16年度版』沖縄電力調査課 2004.8

『沖縄市水道30年史』沖縄市水道部 1988.6

『資料 沖縄経済20年史』沖縄資料通信センター 1969.10 沖縄教育図書刊行会

『うるまの灯 沖縄の電気事業史』古堅 哲 1980.3 日本電気協会

『沖縄大百科事典』沖縄大百科事典刊行事務局 1983.5 沖縄タイムス社

『琉球郵政事業史』沖縄郵政管理事務所編集 1974.3 丸正印刷

『沖縄事始め・世相史事典』山城 善三 他 1983.12 月刊沖縄社

『浦添市史 第7巻資料編6 浦添の戦後』浦添市史編集委員会 1987.3

『写真集 ふるさと泡瀬』泡瀬復興期成会 1999.10

『沖縄県史 資料編12 沖縄戦5 アイスバーグ作戦（和訳編）』沖縄県文化振興会 2001.2

『「ローカルに徹せよ」ーラジオ沖縄35年の歩み』同編集委員会 1995.7

『沖縄・戦後放送史』宮城悦二郎 1994.12 ひるぎ社

『平成7年国勢調査編集・解説シリーズNo.2 都道府県の人口 その47 沖縄県の人口』総務庁統計局編集 1997.9

沖縄市立郷土博物館紀要第13号

あやふや

2004年

沖縄市立郷土博物館

あやみや

第 13 号

も く じ

リュウキュウヤマガメ
〔過去 5 年間の調査より〕

大 谷 勉 (1)
喜屋武 優 子

沖縄島の蝶類食草について
—1992年からの記録から—

比 嘉 正 一 (17)

沖縄市東部の電力供給とラジオの普及について

川 副 裕一郎 (29)

沖縄市池原で確認されたシシ穴の概要について

比 嘉 清 和 (36)

エイサーにみる青年会活動とその展開

与那嶺 江利子 (42)

本誌のタイトルに付された「あやみや」という言葉は『おもろさうし』から引用したもので「美しい庭」の意味をもつものです。調査研究のみならず博物館の活動が、美しい庭のように多くの花が咲き誇ることを願って命名されています。

■表2 日本列島縦断エイサーキャラバンスケジュール■

都市	日 程	派遣青年会	会 場
札 幌	4 / 27 ~ 28	沖縄市越来青年会	丸井札幌本店、市内各地
熊 本	5 / 11 ~ 12	宜野湾市宜野湾区青年会	市内各地
広 島	5 / 25 ~ 26	沖縄市登川青年会	福屋広島駅前店、市内各地
仙 台	6 / 1 ~ 2	糸満市武富青年会	藤崎百貨店、市内各地
大 阪	6 / 8 ~ 9	与那城町屋慶名青年会	阪神百貨店、市内各地
名古屋	6 / 22 ~ 23	北谷町栄口青年会	名古屋三越栄本店、市内各地
郡 山	6 / 22 ~ 23	具志川市赤野青年会	うすい百貨店、市内各地
松 山	6 / 29 ~ 30	名護市青年団やんばる船	市内各地
岡 山	7 / 12 ~ 13	嘉手納町千原エイサー保存会	市内各地
神 戸	7 / 14	嘉手納町千原エイサー保存会	市内各地
東 京	7 / 27 ~ 28	沖縄市胡屋青年会	伊勢丹新宿本店、市内各地
金 沢	8 / 3 ~ 4	南風原町津嘉山青年会	市内各地
新 潟	9 / 7 ~ 8	読谷村座喜味青年会	新潟伊勢丹、市内各地
福 岡	9 / 14 ~ 15	沖縄市園田青年会	市内各地
青 森	9 / 28 ~ 29	勝連町平敷屋青年会	市内各地

■表3 沖縄市エイサーマンズリーイベント日程■

日 付	イ ベ ント	場 所	備 考
7月20日(土)	エイサー資料展 エイサー体験	エイサー会館 パルミラ通り	海の日
7月21日(日)	風山祭	山内中学校	山内地区
7月30日(火)	エイサーシンポジウム	沖縄市民小劇場あしびなー	
8月3日(土)	全国エイサー大会	沖縄市野外ステージ	
8月4日(日)	エイサー道じゅねー	胡屋地区周辺	
8月7日(水)	エイサー体験	エイサー会館	観光週間
8月11日(日)	エイサー道じゅねー予備		
8月18日(日)	沖縄全島子どもエイサーまつり	農民研修センター	
8月21日(土) ~23日(金)	旧盆エイサー道じゅねー	市内各地	旧盆
8月31日(土)	沖縄市青年まつり	市陸上競技場	前夜祭
9月1日(日)	沖縄全島エイサーまつり	市陸上競技場	市主催
9月22日(日)	かりゆしエイサーまつり	農民研修センター	登川地区

■表4 平成14年度県外派遣イベント及び青年会■

日 付	派遣イベント名	派遣青年会	人数	主 催
4月26~29日	全国エイサー道じゅねー(札幌)	越来青年会	30	沖縄県
5月24~27日	全国エイサー道じゅねー(広島)	登川青年会	30	沖縄県
7月26~28日	全国エイサー道じゅねー(東京)	胡屋青年会	30	沖縄県
9月7~9日	函館昆布フェスタ	知花青年会	10	函館市
9月13~15日	全国エイサー道じゅねー(福岡)	園田青年会	30	沖縄県
9月14~16日	町田エイサー祭り	諸見里青年会	45	町田市
10月12~14日	小松どんどん祭り	山里青年会	20	小松市

○ 執筆者

- 大 谷 勉 高田爬虫類研究所沖縄分室
郷土博物館協議会委員
- 喜屋武 優 子 (株)沖縄環境保全研究所
- 比 嘉 正 一 (有)東南植物楽園学芸員
郷土博物館協議会委員
- 与那嶺 江利子 沖縄市立中央公民館
郷土博物館友の会会員
- 比 嘉 清 和 郷土博物館学芸員
- 川 副 裕一郎 郷土博物館学芸員

あやみや 第13号

発行年月日／平成17年(2005年)3月31日

編集発行／沖縄市立郷土博物館

〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6 TEL (098) 932-6882

印 刷／(有)曙印刷

〒904-2172 沖縄県沖縄市泡瀬4-31-15 TEL (098) 938-7884